

不思議なこと

小松進一

(早稲田大学理工学部)

今年の1月末、ついに「すばる望遠鏡」の初観測が行われた。これから21世紀にわたって次々と新しい発見をもたらしてくれることを期待する。

最近、青少年の理科離れが問題になっているが、宇宙の不思議さは、今でも子供たちを科学の世界に誘うのに十分な魅力をもっていると思われる。芽生えた好奇心を放置することなく、子供たちの疑問にひとつひとつついでに答えながら科学への興味を育てていくことが重要であり、そのための環境や仕組みを教育の現場からボトムアップでつくりあげていく努力が望まれる。

宇宙と同様、光も子供たちにとって興味深い不思議さに満ちた存在であり、色や量子力学的なふるまいを含めれば、小学生から高校生まで幅広い年代層の青少年の関心をひく格好の素材である。単に教科書を飾るだけでなく実際に教室で簡単に使えるような簡易な光の実験教材をそれぞれの年代にあわせて提供できれば、理科・物理の授業ももっと楽しいものになるのではないだろうか。小中高の現場の教員も交えてこのような教材を開発するのも、日本光学会の活動の一部としてあってもよいような気がする。

ところで、e-mail・情報検索・ショッピングと、いつのまにかインターネットを手放せなくなってしまった。とくにここ数年、ある事情で文献検索用データベース INSPEC を重宝していたのだが、INSPEC には本誌「光学」が収録されていないようである。本文が日本語の雑誌でも、大学紀要や企業技報の類も少なからず収録されているから、「光学」があってもおかしくはない。それから、たしか10年ほど前に鶴田幹事長(当時)のご尽力で、SPIE の OE Reports に「光学」の目次が掲載されるようになったのだが、数年前から見かけなくなってしまったようである。

海外への情報発信は英語でというのがこれまでの常識で、今後も英語の重要性は変わることはないが、これからのインターネット時代においては、日本語で世界に情報発信することが重要になる、という主張にも耳を傾けるべきものがある[『日本語は国際語になりうるか』(鈴木孝夫, 1995, 講談社学術文庫)]。

話のついでに細かいことを挙げると、「光学」の掲載論文にはふつう論文の1ページ目に書誌事項として記載してあるはずの英文の雑誌名が見あたらない。概要や図表が英語なのだから、世界に情報発信する意図は十分感じられるのだが、英文誌に引用されるのをあえて避けているかのような姿勢は不思議である。この点、応用物理学会が春秋の講演会予稿集にさえ正確な書誌事項を表紙に記載しているのと対照的である。また、英文目次には、研究速報が Short Note, 研究論文が Original というちょっと不思議な対応も散見される。

Optical Review はもちろん重要であるが、「光学」の存在を広く知らせるための地道な努力も、ふつう考えられている以上に大切なのではないだろうか。